Reuse of cultural resources and walking tourism in France —A case study of the “Stevenson trail”

市川康夫 ICHIKAWA Yasuo

IGU Regional Conference 2015 Moscow

(1) 研究発表の概要

本報告は、フランスの3つの地域圏および4つの県にまたがって南北約250 kmに延びる「スティーブンスンの道」に注目し、文化的資源と歩くツーリズムとの関係性を論じたものである。「スティーブンスンの道」は、『宝島』『ジキル博士とハイド氏』などの作品で著名な英国人作家ロバート・ルイス・スティーブンスンが、1879年に発表した紀行文『旅はロバをつれて』に登場するルートをもとに整備された「グラン・ランドネ(GR)」である。フランスでは、サンティアゴ・デ・コンポステラの巡礼に代表されるような長距離を徒歩で移動する観光が1980年代以降ブームとなり、フランスの各書店にはランドネコーナーが大きく設けられ、ガイドブックや書籍が多数揃えられている。スティーブンスンの道はこうしたランドネブームを受け、1994年に発足した「スティーブンスンの道組合」によってツーリズム化された文化観光の一形態である。

本研究の被調査対象となる22組49名のツーリストは、1週間以内の行程による「短距離ランドネ型」とそれ以上の「長距離ランドネ型」の2類型に分類した。両者ともに旅の目的は多岐にわたるが、総じて文化的な体験つまり作家スティーブンスンの足跡の体験は目的の一部であり、地域やテロワール、ローカルの「発見」といった非日常の探求、あるいは自然、精神、景観、健康といった要素が彼らの動機づけにおいて重要となっていた。また、マッシフ・サントラルはアルプスと異なり過度に観光化していないうえ、オーベルニュ地域からセヴェンヌ山地にかけては大都市から隔離したイメージがツーリストを惹きつけ、フランス山村の土地に根差した農村文化や景観、都市や文明から離れた山村に根付く文化の発見がツーリストたちの旅における期待となっていた。観光ホストによって提供される「ロバ貸し」といった仕掛けやスティーブンスン

ンにまつわる旅程における物語は、紀行文を読書経験に持たない多くのツーリストにとって旅の一部にすぎない。彼らにとってのランドネは、自分と自然、あるいは知らない世界にある土地やテロワールに根差したなにかを見つける旅の過程であるともいえる。

この事例にみる紀行文を利用した山村ツーリズムの形態からは以下のようなことがいえる。まず、紀行文という埋もれた文化資源を再活用する過程が、行政的境界や人々の垣根を超えた連携をランドネという共通項のもとに再構築したということ。そしてこのツーリズムが、少ない投資のもとにツーリズムに関わる全てのホストに少しずつの恩恵を与えるという、大規模開発型の山地ツーリズムと異なる文脈を有しており、観光ホストにとってのスティーブンスンの道もまたあくまで彼らの生業や目的の全てではなく一部であるということである。見知らぬ土地への何かを強く求めるランドネのツーリストには、土地と人間との結びつきが強いフランスの風土が反映されているともいえよう。

(2) 研究発表の成果

研究発表は、8月18日にポスターにて行った。来場者からの質問としては、このような歩くツーリズムがフランスだけの現象なのか、それとも他国にも共通するツーリズムなのか、という点に関して、特にアメリカや他のヨーロッパ地域との比較に関する質問があり議論を行った。これに対しては、文化的に歩くランドネが根付いているフランスでは、幼少期や義務教育期に既に山地でのランドネを経験していることが多く、このことが歩くツーリズムへの国内需要に結びついていることを強調した。その他の議論として、スティーブンスンの生涯とそれに関する研究蓄積に関するもの、あるいは他の観光地域におけるツーリズム資源化との比較の点などについて議論を行った。特に後者では、

スキーのような大規模投資による開発型山地ツーリズムに対し、少ない投資で成り立ち、さらに地域主体が副業的にランドネを支えることで可能となるオルタナティブ・ツーリズムとしての側面を特に説明した。

(3) その他

本発表を通して、海外でも特に欧米の参加者からの歩くツーリズムについての認識や自己の体験等を交え

た議論ができたことは、ランドネに限らずハイキングやトレッキングを含めたツーリズムについて再考する良い機会になった。歩くツーリズムは、農村や山村だけではなく、都市内部や歴史地区、あるいは街道などにおいても分布しており、欧米だけではなく国内の観光形態としてもインバウンドなどの視点を取り入れつつ研究を継続していきたい。

(筑波大学)